

私のまちの宝 「正受老人と正受庵」

北町 石澤 滋子

はじめに

飯山町は、十六世紀の半ばに上杉謙信によって築城された町である。昭和四年の飯山鉄道開通までは、物資の集散地として、また商業文化の中心地として栄えてきた。

飯山を支配してきた歴代の飯山城主のうち、佐久間備前守安政、安長、安次の時代に、千曲川の西の丘陵に多くの寺を配置され、現在における寺のまちの基礎が作られた。

松平遠江守忠俱候のとき、正受老人の願いによって小畝山に結ばれ簡素な庵が正受庵である。今からざっと三百年以上も昔のことである。

現在の正受庵

正受庵は当時のままの姿で、簡素な庵であるが、全国の臨済禅徒にとっては霊場に等しい。江戸時代には天下の三庵（江戸の至道庵、犬山の輝東庵……とともに修行を目的とし菩薩を弔わない寺）のひとつに数えられていた。この正受老人の禅堂は、昭和三十五年（1960）に長野県史跡に指定されている。また二〇〇二年には、全国古寺百選の中に善光寺とともに正受庵が推選されている。

私の正受庵、正受老人との出会い

今から三十年ほど昔、飯山の人になるためにこの地に住みついた頃、「飯山には禅を志すものにとって生涯に一度はたずねてみたいところで、正受庵という有名なお寺があるよ」と父から聞いた「正受庵」という

お寺の名前が耳に残っていた。雪消えをまわって散歩のときに探し当てた正受庵は、坂を登ったところにひっそりと木立にうずもれている小さな小さなお寺だった。庫裡の庭先に鄙びた田んぼがあって、その周りの雑木の茂みにメジロがきていた。お寺への関心よりメジロの群の方に心をうばわれてしまうような私だった。が、昭和五十年代に正受庵の宝物展がひらかれた。この宝物展がきっかけになって、正受庵の主人公、正受老人の生涯と庵の歴史に関心を持つようになった。

正受老人

松代十万石の初代藩主真田信行侯（真田雪村の兄）にお部屋さまとして仕えていて身ごもられた三十一歳の母は、故あって飯山城にあずけられ、この城中で生まれたのが後の正受老人である。正受老人である。母は、表向きは城中のお女中方の取締役として派遣されたことになっている。母の名も正受老人の幼名も伝えられていない。飯山上で母とともに大切な人として育てられた。時の城主松平忠俱侯そのとき九歳であった。

十三歳のとき常駐を訪れた和尚さまから「お前には観音菩薩がそなわっている」といわれ、なぜという問いに「自分で考えよ」と「観音菩薩を自ら体験しろ」とさとされた。そのことに懐疑を抱きつつ、苦悶し、出家を希望したが許されなかった。一方城中では武芸に励み文武両道ともに優れ、特

に剣術では飯山藩きっての使い手といわれていたという。

出家のチャンスの訪れは十九歳のとき。城主の参勤交代のお供をして江戸に上り、江戸詰めというまたとない好機をとらえ、たびたび藩邸を抜け出してあちこちの寺を訪ね歩き師となる人を捜し求めた。そしてついに麻生の至道庵無難禅師にめぐり合う。この禅師のもとで出家得度をし、厳しい修行の臨済禅にはげみ二十歳の若さで師から印可を授かることができ、法名を恵端、道鏡の号をいただいた。

二十歳の若さで臨済宗の法を継いだ人は古今東西においても正受老人以外にはいないという。

その後端の許しを得て（印可をいただいた禅僧の慣例ともいうべき）全国行脚の旅に出る。三年の歳月を、東北方面の行脚に費やして自分を磨き、二十五歳の若さで大成し禅の世界では注目される人となった。

旅を終えて江戸に戻った正受老人は江戸での栄誉をすべて断り、母の待つ飯山に帰ってくる。母とともに大変喜んだのは他ならぬ城主松平忠俱であった。候は正受老人の佛弟子になっている。

正受老人は、忠俱侯から与えられた小畝山の庵に同じく忠俱侯からおくられた十一面観音菩薩像を安置し、母を招き共に棲んだ。その母をも教導されたという。母への孝養の厚い人であった。母も正受老人の佛弟子となり専心修行され正受老人が畏怖するほどの尼公になられた人である。

しかし、師無難禅師の病の事を知った正受老人は再び江戸に戻る。そしてよく師に使えその最後を看取られた。師なきあと、三十五歳になった正受老人は飯山に帰り生

涯を飯山で過ごしている。

城主忠俱侯は飯山に戻った正受老人のために、寺領二百石と北信随一の大寺院建立の貴信を申し込まれたが正受は、「僧というものは三依一鉢あれば足りる、それ以上のものは、民の富を奪うことになりかねない」と固く断られた。変わりにと拝領したのが手洗石であり、三百年余を経た今もなお、正受庵の唯一の寺宝になっている。後、松平侯が静岡の掛川上に移られる時記念に拝領したのが庭の梅の木（一位の木）である。

正受老人は身との殿様光圀公から度々の招きも固く断り、生涯飯山を離れることなく小畝山の案で母と共に禅の生涯を送られた。そのおもかげは、父真田信之公の大きな体躯と背の高さと面長の顔かたちをゆずり受け、武芸に優れた人ゆえに強い力の持ち主であったという。

弟子には、不白、宗覚、白隠、鏡水、定石、紹巖など、また静岡村の尼寺の人らしい白禅尼がいる。弟子のうち臨済宗中興の祖である白隠の名は、あまりにも有名である。

白隠が宗覚にともなわれて正受庵にきたのは、一七〇八年（宝永五年）四月のこと。正受老人六十七歳、白隠二十四歳のときである。白隠が去った後も正受老人はひたすら法を守り、八十歳のとき末期の一句「死急にして道難し、無言の言を言として道わじ道わじ」を遺わして座禅を組まれたまま、の姿で入滅されたという。

正受老人の六十回忌に、白隠禅師の高弟東領和尚さまが雲水を引かれて来庵し、大法要を営んだ。その折に栽松塔をはじめ母梨雪さまと正受庵二世宗寛和尚の墓を建立した。

正受庵

時が流れ、第五世東溟和尚さまが文化八年に入庵されたとき、庵はすでに荒れすさびその内部はまったくの伽藍洞であたらしい。この東溟和尚さまは、正受老人の百年忌が四年後に迫っていたので三年の年月をかけて関東より畿内中国、四国まで寄金集めにまわり、ようやく6月に帰庵された。その八月、親しくしていた、時の城主本多助賢侯がこともあろうに庵の宝である水石を再三にわたり所望された。それを断り通したので、百年忌を見ることなく和尚さまは飯山から追放されてしまった。しかし晩年を英岩寺にかくまわれたとのこと、英岩寺に「東溟山人」と彫られた自然石の塔が故阿部芳春先生によって発見されている。

二十五年余の間に正受庵は幾度かの盛衰を繰り返している。明治の中興に至るまでの間、無住の庵になることもしばしばであったらしい。

弘化四年の善光寺大地震で庵は倒壊するが、その八月、正受老人が植えて育てられた杉の大木一五〇本を用いてもとの姿に再建された。

明治六年政府の廃佛毀釈政策によって檀家のない正受庵は廃庵とされたが、信仰の厚い地域の人々に守られてとり毀されずにすんだ。明治十一年、明治の元勳で自らも禅徒であった山岡鉄舟はこのことを憂い義兄の高橋泥舟らと共に東奔西走し、度々飯山を訪れて復興に努力された。そしてついに明治十七年京都妙心寺の直末として再興を許されている。

新しい庵主は、雲水を引き連れて入山し、寺の行事をとりおこない寺の復興拡張も進

み、ようやく光が差し始めた頃、明治十九年五月、新町から出た大火で（六ヶ町が焼けた）人々には庵を顧みる余裕がなくなってしまった。

その上同二十年には、山岡鉄舟が逝き、庵の再興は頓挫してしまった。その後の正受庵は大正も末期にもなると、雨漏りがし床板がくさるようになってしまった。

正受老人の善意の研究者である、故阿部芳春先生や故宇田小惣先生が、そんな正受庵に心を痛められ、自力で庵を守られた。

昭和二年第八世塚田祐信師が入山された。庵の修理に力を尽くされたが二年ほどで退山されてしまう。そのあとを兼務住職として竜沢寺主玄峯和尚さまを招き、丈質を設け立派な庫裡を創建した。

この頃、暗に学問のある尼僧さんが住みつき和尚さまと共に蚕を飼ったりして暮らしていた。後和尚さまが退山される前後から精神に異状をきたし、寺を出され哀れな最後を送っている。

その後、清水市の鉄舟寺主月庵和尚さまが入山された。この第九世月庵台巖和尚さまは、前住の清水市では生仏さまといって尊敬されていたかただという。徳の高い和尚さまであった。戦中戦後の苦しい時代に庵を守ってくださった、月庵様が病をえて清水市に戻られたあと、佐々木老師、そして故酒井盤山和尚さまが案を守り広く人々を教導し正受庵の存在を世間にアピールされた。

現在、盤山和尚さま亡き後をその弟子原井寛道和尚さんが庵主のなって正受庵を守って下さっている。寛道三と親しみを込めて呼ばれているこの和尚さまの「オー」とよくひびく托鉢の声が待ちに聞こえるよう

になって久しい。毎月決まった日に町を行く托鉢の姿は法の町飯山の風物詩でもある。

正受庵は今、音もなく降り積もる深い雪の中に静かに眠っている。雪の晴れ間に聞こえてくるのは枝から落ちる雪の音や小鳥たちのささやき、そして枝移りする鳥の羽

音ぐらいだろうか。

このような素朴な庵が信仰とともに息づいている飯山の町は、私の第二のふるさとである。心のいやしを求めて訪れる人々にとって、飯山の宝である正受庵はますます貴重なところになることだろう。